

16-5 カムイユカラ「カンナカムイ カッコクカムイ

(ノウワオオオ)」解説

語り手：鍋澤ねぷき

聞き手・解説：萱野茂

萱野：えっと、これは **kamuyyukar** [神謡] ですね。

kannakamuy というのは……、私は、あー、竜、竜神を、竜の神様を夫としておったものでありました。それは、まー途中からそれなのわかったものだったんですけれども、私はキレイな男を夫として何不自由なく生活をして何年か過ごしました。

ある時から夫は炉辺に寝たつきりで全然、その動こうともしない。そうすると一羽のカッコウ鳥が私たちの住んでおる家の西の屋根、東の屋根からもう、本当にもう毎日毎日鳴いてばかりいる。アイヌ……アイヌ風と言うと **kakkok rek haw** [カッコウが鳴く声] というのは、鳴くということではなくて、まー歌うというふうにも言うんですけれども、この場合はもう非常にそのカッコウ鳥の声が激しくするので、もう夜も眠れないぐらいに、その音、その声を聞いてやかましく思っておった。

ある日のこと、夫が座って言うのには、「私はいままで素性を明かしませんでしたでしたが、あー **kannakamuy** といって竜神の二人兄弟の弟の方が私でございましたと。それで、えー神様の国で私の好きな女を探しても全然見つからないので、あんたばかりが、アイヌの女ではあるけれども精神も良いので、お嫁にしたいと思って訪ねて来て、ここで一緒に暮らしておったんです、と。けれども、天の神様からぜひ帰ってこいということで、お使いに来たのがカッコウ鳥であったと、それでもうこのまま帰らずにおったら私は神であるのに、その一、私の父神も母神もともに、その神の座から引き降ろされそうになっていると。だから私は帰りますと。そのあとでキレイな男の人が来て、今度は普通の人間の男が来て、あんたの夫になるでしょうと。そして子供が何人か生まれたら、ま、神の国へ、私の元へ来てもらいますよ」と、そう言いながら私の夫は着替えをして、炉辺を **tapkar, tapkar** というのは上座へ下座へというふうにとちょっと動く所作をしたら、それが、**rikunsuy peka yaypekare** [天窓へ向かって行く] と

いうふうにでていましたが、空窓のところへ行って、大きな音をたてて天国へ帰ってしまったと。

それから何年かしておる内にキレイな男の人が来て、まだ一緒になって、子供何人か持って、まだ年寄というほどでない私が、これは病気をしてもう間もなく死ぬでしょうと。こういうことは神の夫の所へ持っていかれるというか、行くことになるんでしょう、と。一人の女が、その一、一人の女が、んー語りました。

これは **kamuyyukar** [神謡] でしたね。

鍋澤：んだ。